



TITLE:

# 総合天文博物館への準備

AUTHOR(S):

池田, 政晴

---

CITATION:

池田, 政晴. 総合天文博物館への準備. 天界 1936, 16(180): 199-201

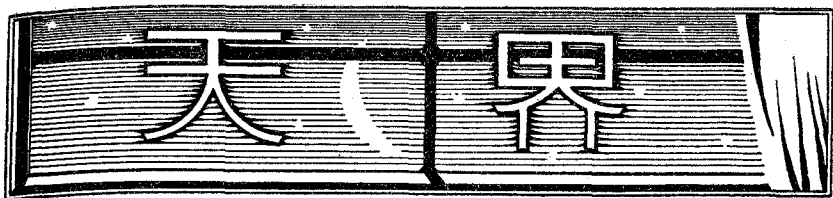
ISSUE DATE:

1936-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167203>

RIGHT:



第百八十號 (第十六卷)

(昭和十一年) 四月 號

## 綜合天文博物館への準備

會員 池田 政晴

我々東亞天文協會々員が爲すべき明日への準備の中、最大なるものは何かと問はれた場合、吾人は躊躇する事無しに、綜合天文博物館を擧げる事が出来る。

我國に於ては、學校教育施設は相當完備して居るが、社會教育施設は遙に遅れ、殊に博物館、其中にも理學博物館方面に甚しい。言ふまでも無く、社會教育施設は學校教育施設に較べて、優るとも劣らぬ重要なものであつて、圖書館と博物館とはその雙翼であり、國力發展の2大礎石である。

若し、日本民族が將來眞に獨創的となり、著しい發展をするとすれば、それは必ず我國に、ミュンヘンの獨逸博物館や、紐育の American Museum of Natural History にも勝る理學博物館の普及した後であらうかとさへ言はれて居る。

吾人は、此際聲を大にして、其機運を作ると共に、其來るべき時代に對して充分の準備を爲さねばならない。

幸に、近來識者の注意が多少此處に向けられ、國立大博物館の計畫も追々考慮され、現實には小規模ながら、仙臺の齋藤報恩會博物館、東京科學博物館、京城の科學館の活動となつて現はれて來た。今、吾人は天文の分野で、眞面目に天文博物館を考慮すべき時期に達して居ると思ふ。

その天文博物館が理學博物館の一部であらうと又獨立の博物館であらうとを問はず、又官公立であらうと又財團の維持するものであらうとを問はず、近き將來に於いて、最も廣い意味の綜合天文博物館を學術上産業上の我國の實際上の中心たる關西に得たいとは、決して我々會員に取つて過ぎた願では

無いと信ずる。

新しい意味の理學博物館の仕事は大別して次の通りとなる。

(1) 研究方面

天文學研究資料の蒐集，保全，研究，出版，天文臺の經營，觀測隊の派遣

(2) 天文圖書館の經營

(3) 教育方面

天文資料，實驗裝置，可動模型の陳列，説明。

觀測會，講習會の開催，プラネタリウムの經營。

社會へ天文ニュースの供給，天文學者傳記の出版。

講演，映寫による學校教育への進出。

即ち，從來の博物館の如く寶物等を陳列して觀覽者を待つと言ふ様な消極的なものでなく，一方には多大の天文資料を保持して研究を行ふと共に，方には之を掲げて社會教育，學校教育に積極的に乗り出し，常に時代に先行し，時代を導く所に近代理學博物館の特色がある。

以上の様な事業に對しては，本協會の如きは，會の目的，これまでの活動狀態から推して，蓋し最適者であらう。其全國に互る支部は直に，地方博物館，郷土博物館への連絡の中心となり，資料の蒐集，保全，其活用に萬全を期し得られる事であらう。

併しながら，此様な天文博物館が一朝一夕に出来るとは思はれない。我々會員は一步社會の情勢に先んじて，理學博物館をよく理解し，舌にペンに，先づその機運を作らねばならない。彼の獨逸博物館建設の苦心の如き，吾人に大なる教訓を與へる。其建設者にして初代の館長たるミラー博士は，もともと電力技術家であつたが，英國の Science Museum を見て深く覺る所あり，10數年かゝつて萬全の準備をなし，1903年時到来りと見るや，彼は遂にその大計畫を發表したのであつた。ミュンヘン市は土地を提供し，政府は建物を譲渡し，工業會社は競ふて参考品，標本を陳べ，全國民一致して其完成に努力したと言はれて居る。不幸にして歐洲大戰の爲其事業は一時頓挫したが，1925年遂に開館し，ミラー博士半生の心血を注いだ大事業も，國民の心からの理解によつて完成せられたのである。これを一時期として英，米，其他各地に理學博物館が續々として起り，「理學博物館時代来る」の感じさへせらる

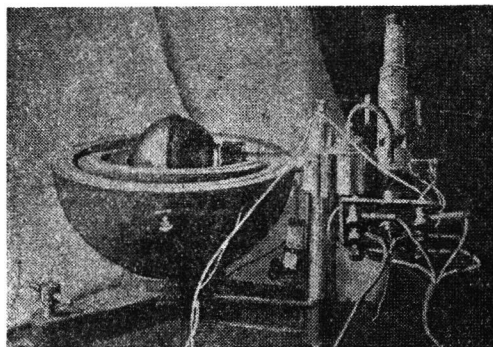
ゝに到つた。我國に於ても、遅れたりとは言へ、近來識者の注意がやゝ、此方面へ向つて來たのは眞に同慶に堪へない。

我東亞天文協會は創立以來15年、いさゝか天文界に貢獻し來つたが、今、この來るべき理學博物館時代に直面して、綜合天文博物館を計畫し、その完成を目あてに進展せんとして居る。本會存在の意義眞に深しと言ひ得べきか。

(昭和11年2月)

### 宇宙線の觀測

最近學界の興味の的である宇宙線一遠い天空から放射され人體を透すX光線よりもさらに強い透過力を持ち、われわれの生活にも深い關係をもつといはれてゐる宇宙線



これが觀測器 左容器中央のアルコン・ガスを満たした圓球に宇宙線を受けその及ぼす強さを右顯微鏡で觀察する

はまだはつきり正體がわからないところからベルギーの物理學者ピツカール博士のごときは氣球を成層圏まで、飛ばして研究するなど世界各國の學者は血眼となつてその正體究明に躍起となつてゐるが、わが學術振興會の學術委員會(宇宙線研究)でもいよいよ世界各國の研究者と連絡をとりわが國における宇宙線の強度、分布の觀測を行ふことに決定、その觀測器がこのほど

理研仁科博士の指導のもとに完成した。この器械は携帯用のものでアメリカのコンプトン型を採り各部分には理研獨特の工夫が加へてある。石井、山崎、淺野三研究員が數日前箱根山頂で行つた試験的實驗でも満足な成績を示し、地上からの高さや宇宙線の強度の割合がアメリカにおける觀測の結果と同様であることがわかつた。なほこの携帯用のほか理研では南洋パラオ島、富士山、東京、豐原等の數ヶ所に据ゑつけるシタインケ型の自動記錄器の作成に近く着手するが、この器械で得た同時觀測記錄はドイツ・ケーニヒスベルグ大學のシュタインケ博士のもとに毎月報告、同博士は世界の約十ヶ國から集まる同様の記錄で宇宙線強度の世界地圖を作成する筈である。かくてこの世界各國の綜合研究の結果謎の宇宙線の正體が明らかになる日も近いものと期待されてゐる。(讀賣新聞より)